

齋藤 愛輝
(さいとう あいき)

東京電機大学
未来科学部
建築学科



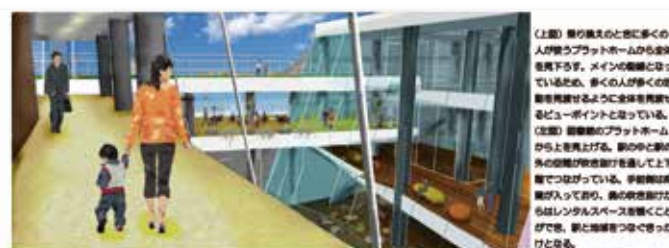
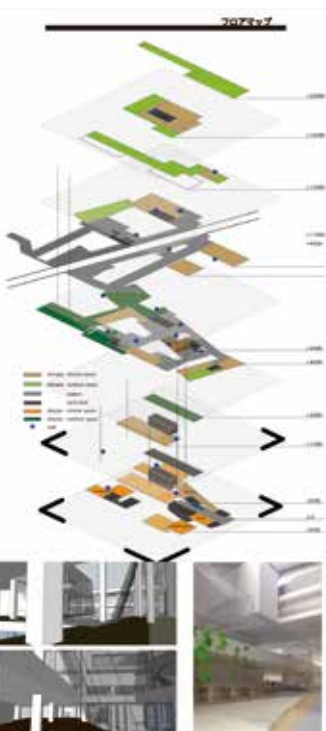
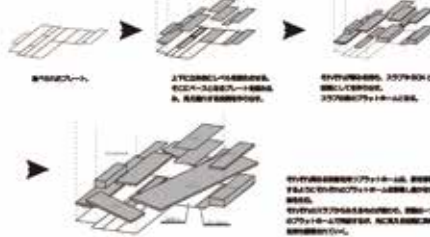
錯綜するプラットホーム

diagram

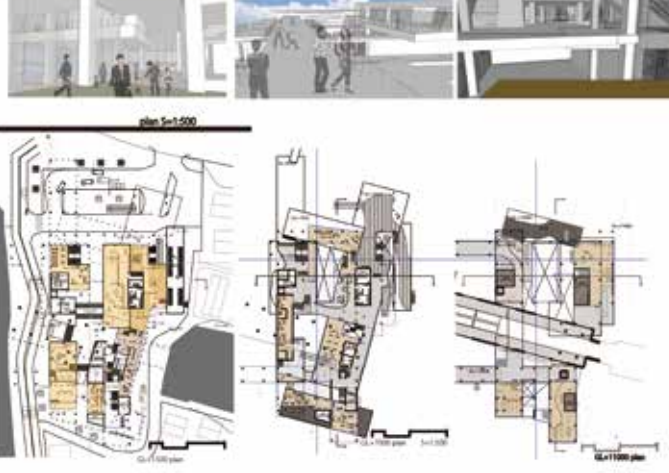
図書館によって生まれるもの

スタブが積み重ねられたビルが立ち並び、屋外の駅までも特徴のない高層化された町並みがあらわれつつある。その町並みは外観の多様性が少なく、それぞれが孤立しているようなものになっていると懸念する。異なるものといわれる形質だけでは足りない。スタブの重なり方による可視性を磨き上げていく。駅の中に図書館があることで、異質な建物の美観や多様な人の影響を受け、本来身近なものとして受け入れられるようになり、また読書を通じていくつもの時間とつながっていく。

それぞれのプラットホームの活動



(上部) 乗り換えのときに多くの人が使うプラットホームの中心部を視下ろす。メインの通路とつながっているため、多くの人が歩くの感覚を再現できるように全体を再現させるビュースポットとなっている。
(下部) 駅構内のプラットホームから上を見上げる。駅の中と外の空間の連続性を演出して上下層をつなげている。手前には商業が入っており、奥の吹き抜けからはレンガスペースを覗くことができ、駅と連続感をつなげることができる。



講評

新松戸駅は都心部に向かう通勤の主たる交通路線であり、沿線に広がる商業・娯楽施設へと向かう常磐線と武蔵野線が交差するターミナル駅でありながら、東西の高低差が大きい立地上から駅へのアクセスポイントが西側1箇所となり、東側の住宅地は駅に背を向かれた形になっています。その東側から駅へアクセスするための施設を異なる時間感覚を持つ2つの施設、止めどなく流れる時間の象徴の駅舎と留まろうとする時間の象徴の図書館を、微妙に異なるレベルの立体構成、微妙にずれる軸の平面構成により重ね合わせて、エキナカ空間とエキソト空間が互いの存在を意識しながら結び合う、魅力ある提案だと思えます。

「錯綜する」と言いながら既成駅舎や動線に対する遠慮が見え、分断された東西地域の繋がりや西側からの引き込み動線が十分展開しきれなかったところが残念に思われます。
(審査委員：海老原 智子)

敷地は千葉県松戸市新松戸駅の東側駅前。現在都市から取り残された敷地となっている東側一帯だが、松戸市都市計画道路により今後東側も発展していくだろう。その第一歩として駅を取り込んだ複合施設を計画する。

スラブの重なり方を操作し東西、南北をつなぐ交差点の多様な人々の行き来交流や活動する場所を作り可視化させることが重要だと考え、2つのレベルにあるプラットホームのボリュームを生かし、豊かなレベルの変化を作り出した。それぞれの機能を持つ各プラットホームは、駅を移動するように行きたいと思う空間に向かっていく。隣に位置するプラットホームの異なる活動が見え隠れし、建築全体で一つの空間と感じられていく。ちょっとした無駄な時間、通勤通学の時間が普段の生活になかったものを取り入れるきっかけをつくりだす。

